

# キャリア教育におけるキャリア形成意識の調査結果と考察

畠 一樹 (徳島大学総合教育センター・キャリア支援部門)  
西條 真結乃 (徳島大学大学院創成科学研究科地域創成専攻)

## 1. はじめに

近年、内閣府の「国民生活に関する世論調査」<sup>1)</sup>の集計結果の中で“働く目的とは何か”という質問に対して、「生きがいを見つけるために働く(18~29歳:6.0%)」と若者が働くことに生きがいを見いだせていない現状が報告されている。これに関連して、新規学卒者の早期離職問題など若者のキャリア発達が注目されている中で、大学在学中のキャリア観や仕事観の醸成が求められている。人はキャリア発達において様々な成果を蓄積しながら成長していくが、その成果を獲得するための行動はどのような思考に起因しているのか。行動という顕在的に確認できる観点以外に、思考およびその深層にある価値観といった潜在的な観点からの意識調査を実施し、教育効果の向上に反映することは、学生のより良いキャリア発達の実現に資する取り組みになると考えられる。本研究では、キャリア教育において実施したキャリア形成意識の調査結果と考察を報告する。

## 2. 授業の概要

### (1) 調査対象とした授業

2023年度前期に開講された専門教育科目「キャリアプラン(学部学年:総合科学部2年次,選必修区分:選択必修,履修者:115名)」を調査の対象とした。

### (2) 授業内容

本科目では学生が在学中に効果的なキャリア形成を実現すること、ならびに卒業以降で仕事に定着し活躍することの実現を目的としている。そのために、授業では成長の階段を登るために自己理解を深め将来ビジョンを描くことで行動のマインドセットをする。さらには行動計画書を作成しながらセルフマネジメント手法を習得できるように授業内容を設計している(図表1)。



図表1 成長の階段と授業計画

### (3) 調査方法

本学の教務システムにあるキャリア学習ポートフォリオのレポートコメント機能を利用して、各講義で講義内容に応じた質問の回答を得ている。この回答から教育効果の向上に関連する結果を集計した。なお、今回得られたデータはすべて学生の主観的な自己評価によるものである。

## 3. 調査結果および考察

### (1) 自己探求段階(調査回:第1講)

人生を通したキャリア発達を10段階に区分した十牛図を用いて現在地点を調査した。その結果、キャリア発達の第1段階「今からキャリアの探求を開始する段階(22.7%)」と第4段階「真の自己の正体(全体像)を把握しようと四苦八苦する段階(44.3%)」の2段階でピークを示した。以上より、キャリア発達の分布が十牛図の前半5段階にほぼ偏り、そのうち第1段階と第4段階でピークを形成することがわかった。また、自己探求のマインドセットおよび自己理解を重点的に深める改善の方向性が得られた。

## (2) 思考3要素 (調査回: 第3講)

行動を決定する思考について、思考を3要素(ロジカルシンキング, クリティカルシンキング, ラテラルシンキング)に区分し、そのバランスの状態を調査した。正解がある時代から正解がないVUCA時代へシフトしている現代においてはラテラルシンキングが重要性を増すことが予測されるが、最大値を10とした場合に思考3要素のバランスを自己評価した結果、ロジカル:クリティカル:ラテラル=4.2:3.4:2.4とラテラルシンキングの割合が最も低い結果を得た。以上から、自己理解において視野を拡張するなど講義内容にラテラルシンキングの要素をより充実させる改善の方向性が得られた。

## (3) 生きがい3要素 (調査回: 第6講)

本科目で生きがいあるキャリアを歩むうえで必要としている要素(好きなこと, 得意なこと, 気持ちいいこと)の満足度について、各要素の最大値を10として調査した。その結果、「好きなこと」は平均7.1で自分の在り方を自覚し始めているが、それを実現するための手段「得意なこと」は平均5.0と「好きなこと」より2.1pt低下する。さらに、「好きなこと」「得意なこと」を満たした自己実現(一人称)から自己超越的な貢献(二人称, 三人称)を満たす「気持ちいいこと」が平均4.8と最も低い結果となり、生きがいにピントを合わせるための仮説設定と検証行動の計画が重要であることが分かった。

## (4) 大切にしたいNeeds (調査回: 第8講)

NVC Japanで使用されている「普遍的な人間の必要リスト」<sup>2)</sup>を使用してNeedsを調査した。その結果、「協力」「コミュニケーション」「仲間」「思いやり」「貢献」といった“つながり”と、「高め合う」「成長」といった“発達”,そして「楽しみ」を意識するNeedsが上位になる傾向が分かった。この傾向は生きがい3要素と親和性があり、両者を関連付けた教育内容の改善の方向性が得られた。

## (5) 強みと弱みのバランス (調査回: 第10講)

事実を解釈する際に強みと弱みのどちらに偏

りがあるかを全体を10としたときの比率を調査した。その結果、強み(4.8):弱み(5.2)と若干弱みに解釈する傾向はあるがほぼ偏りがなかったことが分かった。以上より、行動啓発において強みと弱みのバランスを同等に意識した講義内容に改善する方向性が得られた。

## (6) SWOT分析 (調査回: 第12講)

SWOT分析マトリクスの各事象の解決策である積極攻勢策(S×O), 弱点強化策(W×O), 差別化策(S×T), 防衛策(W×T)において, ①最も取り組みたいと思う解決策, ②最も取り組みが難しいと思う解決策を調査した。その結果, ①最も優先したいと思う解決策段は弱点強化策(44.2%), 次に積極攻勢策(40.0%)と機会に対する反応が高い。一方で脅威に対する反応は防衛策(13.7%), 差別化策(2.1%)と機会より低下する傾向があることが分かった。次に, ②最も難しいと思う解決策に対する意識はほぼ均衡している結果となった。以上より, VUCA時代においてリスク管理が置き去り傾向にあることが危険側な意識と解釈し, 差別化策や防衛策といった脅威により力点を置く改善の方向性が得られた。

(7) 以上の具体的な結果についてはポスターセッションにて報告する。

## 4. 今後の展望と課題

今回の研究成果として, 学生のキャリア発達に対する潜在的な意識の傾向を把握することができた。このことから, 学生の精神的な核心を意識した授業改善の方向性が得られた。キャリア教育の効果の向上において, 今後はより多角的, 深層的な領域に探究の範囲を拡大するとともに, 客観的な情報把握に努めていきたい。

## 参考文献

- 1) 内閣府, 国民生活に関する世論調査(令和4年10月調査), 集計表23(問17), <https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-life/index.html#tablelist>
- 2) NVC Japan, 普遍的な人間の必要, [http://nvc-japan.net/material/feelings\\_needs\\_list/](http://nvc-japan.net/material/feelings_needs_list/)